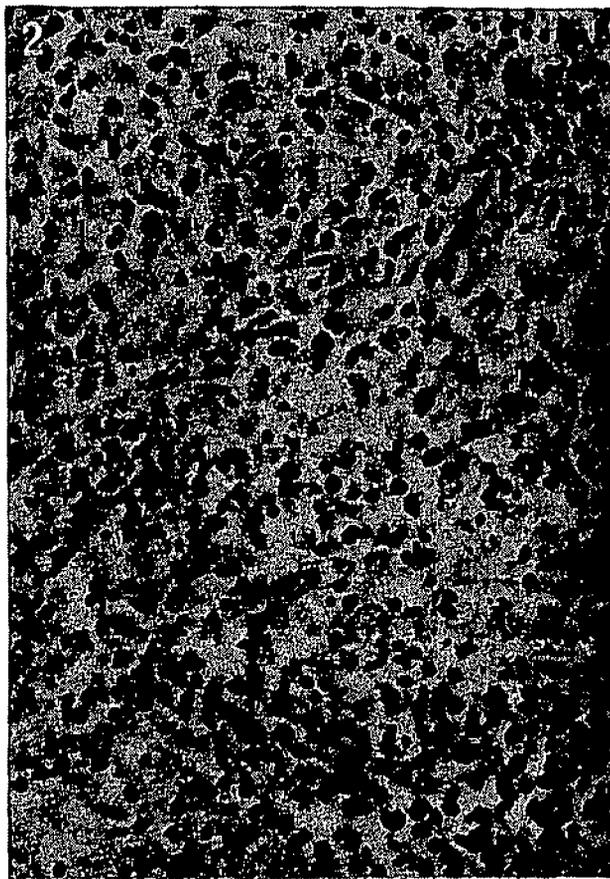
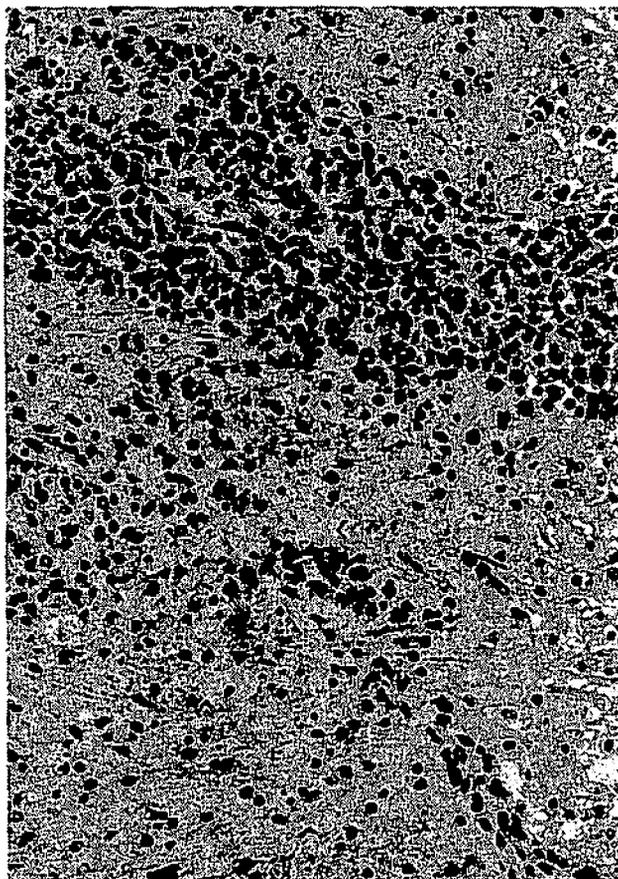


# 牛のリステリア菌症様脳炎

家畜衛生試験場 北海道支場 第11回獣医病理研修会標本No.158



北海道、別海町で飼育されていた年齢不詳のホルスタイン種、(雌)牛である。体格中等、栄養可良であった。昭和44年6月19日に発病し、眼光鋭く、眼球突出、流涎を認めた。スタンションを脱すと左旋回運動をした。T. 38.4℃、P. 22×4、R. 6×4。胃腸蠕動なく、尿所見(潜血、ケトン、糖、蛋白)は異常なく、pH8であった。白血球像はリンパ球23%、好中球66%一桿状7%、分葉59%一、単球10%、好酸球1%であった。なお、この牛は10日前に左角を欠損していた。翌20日は前日投与した抗生物質およびビタミン剤治療の効なく、著しく脱水し、起立不能に陥った。リステリア症を疑い、昭和44年6月20日、瘞用殺した。脳髓の細菌学的検査では、脳をはじめ他の臓器から *Moraxella bovis* を分離した。

**組織学的所見：**病変は血管性細胞浸潤と小膿瘍から成る化膿性炎であった(写真1、22倍、H E 染色)。血管性細胞浸潤は血管壁細胞の腫脹と結合の離開があり、拡張したVR腔には4～5層あるいは7～8層にも及ぶ厚い細胞集簇が認められた。浸潤細胞は主として組織球様細胞、リンパ球、形質細胞から成り、所によって好中球浸

潤が著しいもの、あるいは少量の好酸球が参加しているものがあつた。この変化は延髄、橋脳部脳膜にも少量ながら認められた。いっぽう、好中球、神経膠細胞の浸潤を伴ない脳実質の変性、融解、粗裂化を示す小膿瘍が多数分布し、中には顆粒細胞も認められた(写真2、300倍、H E 染色)。この小膿瘍は血管が中心にあるもの、血管に隣接したもの、あるいはとくに血管との関係を確認できぬものなどがあつた。構成細胞のうち、好中球と顆粒細胞は多いもの、少ないものが交錯しており、中には巨態細胞が散見された。以上の病変は延髄、橋脳、四丘体、小脳、頌髄に分布し、他の部位には認められなかつた。なお、小膿瘍にはグラム陰性桿菌を見出すところがあつたが、グラム陽性菌は認められなかつた。

**組織学的診断：**リステリア菌症様脳炎

*Moraxella bovis* でこのような特徴的病変を示すという記載は見られない。病変の分布と質からリステリア症による脳炎が疑われる例として置きたい。分離菌と病変の関連は不明であるが、脳炎と *Moraxella* 菌感染は今後の懸案課題として残された。